

筑豊における炭住生活誌：生活史の手法を通して

高嶋，文
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/2320992>

出版情報：九州人類学会報. 14, pp.88-90, 1986-06-25. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



筑豊における炭住生活誌

— 生活史の手法を通して —

高 嶋 文

本稿は、九州大学大学院教育学研究科において昭和60年度に提出した修士論文の要約である。

1) 研究の視点と方法

本研究は、主に明治中期（1890年代）から1950年代にかけて福岡県筑豊の基幹産業であった石炭鉱業の労働者が集中して居住していた炭住（炭鉱住宅）での日常生活を復元することを目的としている。

しかし筆者は、単に炭住生活の過去の単純な復元だけを目的とするものではない。生身の人間が主体的に生き、暮らした筑豊の炭住生活像を、できるだけ理解したいと考えている。そのためには、より多くの個人的体験を収集し、それらの共通項を抽出する手法を通してその典型像、平均像を表出するのではなく、現実にそこで生き、暮らした個人の体験としての各個人独自の「炭住生活誌」として記録、報告する。

これは、宮本¹⁾、谷²⁾が、従来の民俗誌、民族誌に対する不満、物足りなさを克服しようとした一解答としての「生活誌」を意味する。つまり、抽象化された人間でなく、具体的、主体的な人間が現実に生きている日常生活をつぶさに観察し、接触することで生きた人間のあり様を描き出そうとする視点で記述されたのが、彼らの「生活誌」であった。

炭住生活者は、厳しい労働環境の下にあり、日常生活までも管理されていたといわれる。しかしその中で彼らは、自らの状況をただなすがままに受けとめていただけではない。彼らも各自一人の個性を持った人間として、固有の価値観に基づき、主体的に生き暮らしていたのである。筆者は、炭住で生き、暮らしていた人々の人生を通して彼らの価値観を探ることが最終目的である。

また筆者が本研究で対象としている筑豊の炭住生活は現存していない。したがって、インフォーマントの胸中に現在も現存する炭住生活を把握する手法として、また生活誌に不可欠なインフォーマントの実感を共有するための方法として、さらには筆者の事例研究の最終目的である炭住で生き、暮らした人々の価値観を導く手段としても有効な生活史を本研究で採用した。

生活史は、多方面の分野で使用されてきたが、一時、社会科学が真の科学になるには、客観的な精神に耐えうる数字を基本にしなければならないという認識が主流を占めるようになったため、生活史の資料の貢献が認められなくなった。特に致命的な問題点として代表性が挙げられる。しかし筆者は、代表性を厳しく追求してきた統計学的分析方法により「典型的人間像」を示すことが、果して対象社会に居住する人間を理解する最良の方法であるのかという疑問を感じる。Lewis³⁾も批判したように、文化類型という抽象なレベルで生活様式を記述すると、調査対象の核である個々の人間が欠落することになる。筆者も、代表性を徹底的に追求するあまり、生活史固有の存在価値を認めず、生々しい人間を見失うことの方を懸念する。

このように生活史は、対象社会の代表的な人間を探究することは困難だが、平凡で普通の人々及び彼らの生活をより深く理解することができる。しかもインフォーマント自身の言葉で報告することにより、Lewis が貧困研究につきものの感傷過多や動物扱いなどの調査者の偏見を是正しようとしたように、筆者も、一般にマイナスのイメージで捉えられがちな炭住生活を、炭住で暮らした平凡で普通の人々自身の

語りから、より偏向のないありのままの姿を捉えたいと考えた。

したがって本研究では、生活史の手法を用いて、個々の人間の具体的な炭住生活誌を収録した。その場合、各インフォーマントが話した語り口そのままに表出することは枚数を莫大に必要とすることになる。そこで各事例を三人称で表現することにより簡単にまとめ、5事例（9名）を報告し、さらに次の章で、これら複数の事例を比較、検討し、分析した。そうすることで、炭住で暮らすことで得た共通の価値観を探り、その価値観に基づいた筑豊の一炭住生活像の描写を試みた。これは一見先に述べたことと矛盾するが、あくまでも質的側面を重視した生活像である。

以上述べた理由から、筆者は、1985年5月から12月にかけて、かつて筑豊の炭鉱で働き、炭住で生活していた人々の生活史を収集するという方法を核にして調査を行なった。

2) 調査結果

本研究で収集した生活史5事例（簡潔に要約不可能なためここでは省略する）を分析した結果、炭住で暮らすことで得た価値観及び彼らの共通の価値観に基づいた筑豊の一炭住生活像を筆者なりに捉えることができた。それを報告する前に、まず従来我々が筑豊及びその炭鉱労働者に対する固定観念を示すことから始める。そうすることで筆者が研究した生活像との相違をより具体的に浮びあがらせることができ、そのため筆者が本研究を行なった意義を明確に示すことができると考えたからである。

事例で挙げられた「炭坑太郎」、「囚人」、「特殊階級」という蔑称でも明らかなように、一般に我々つまり炭鉱にかかわることのない人々は、筑豊の労働者に対してマイナスの集合的イメージである偏見、蔑視、差別を共有しており、それが固定観念となって今日迄も存在し続けているといってもいいのではないか。

これには、初期の炭鉱（坑）労働者が、ムラの落ちこぼれや不法者、下層農民であったという歴史的要因がまず考えられる。また特に今日の固定観念の原像として考えられるのが、明治・大正時代の炭鉱労働者像である。彼らは一般に、搾取され、暴力的支配による圧政を受けた虐げられた人々というイメージが強い。また当時の納屋制度は、ヤクザのしきたり（規範）が適用され、しかもイレズミをする者も多く、ヤクザの集団とみなされ差別された。

事例でも明らかなように、ほとんどの人が、来鉱・来住前にマイナスのイメージ、偏見を有しており、以後にはそれが解消されている。彼らは実際には、炭鉱・炭住生活について全く知らず、曖昧な情報・固定観念を鵜呑みにしていたのである。

また各事例の入鉱動機である貧困、炭鉱労働（危険、裸同然で真黒になりながら地の底で働くなど）、宵越しの金は持たないという生活態度は、事実ではあるが人間のあり方として差別されるべき理由はないと考えられる要素によりマイナスのイメージが形成された。が、一方、外国人労働者の強制連行や未解放部落出身者への差別という過失も存在している。

さらに、石炭鉱業の急速な発展と衰退という産業史及び現在の筑豊に残存している石炭鉱業に関連した諸問題は、暗く陰湿なイメージを一層定着させた。最後に、マスメディアによるマイナスのイメージの増幅も考えられる。マスメディアは、筑豊を現代の日本のひずみ、矛盾の集約点として捉え、社会告発の手段として、より弱者に目を向けた。

これらと同様に、「相互扶助」や「義理人情に厚い」というプラスの集合的イメージの固定観念も存在

する。しかしこれらも、危険や弱者の立場を強調させ得るため、強度のプラスのイメージにはなり得ず、またマイナスのイメージへの転化も容易に可能となる。

しかし実際に炭住で暮らした人々の語りから、まず筆者は、彼らが炭鉱での体験とは関係なく、他の人々と同様、平凡な普通の人間である事実気づかされた。つまり、ほとんどの人にとり、人生で一番つらかったこと及び楽しかったことは炭鉱での体験とは直接関連がない。また日常生活においても、例えば食生活は、戦中戦後の食糧の特配があつたものの、献立など当時の他地域と同様の食生活であつたといえる。

しかしまた逆に、各人の生活史から、炭住で暮らすことで培われた共通の価値観を見出すことができた。しかも、従来の「相互扶助」、「義理人情」というのでなく、各人の語りの中からその価値観をより適切に表現すると考えられる新しい概念を見出すことができた。それは、「とことん付き合う」、「分かち合い」の価値観である。「深入りしない付き合い」を好む個人主義化しつつあるといわれる現代とは逆に、この価値観からすればわずらわしいとさえ思える人間関係である。しかし炭住生活者は、わずらわしさを全く感じず、あたり前と思うため、炭住を離れた現在の居住地での人間関係を不満に思うのである。彼らはこれらの価値観を共有しているため、一つの大きな家族のようにすらなっている。

これらの価値観が培われた原因は、従来より強調されている危険性の他に、入鉱時の生活状況、棟続きの家屋、水道や風呂の共同使用、鉱員間に出世競争がないことなどが考えられる。また経営者側からすれば、生活管理に便利などの理由で、彼らを炭住に押し込めたといえる。しかし、彼らがそこで培った価値観迄押しつけられたものではない。彼ら自身が主体的に獲得したものであり、彼らが人間関係の中で育て合つたものである。

Plath⁴⁾は、日本人は親密な仲間達との長い人間のかかわり合いを通し成熟し、様々な人間関係をうまくとり結ぶ能力を重視すると分析した。炭住社会は、「とことん付き合う」ことを通して成熟し、互いの人生を「分かち合う」ことで人間関係をうまく結んできた人々で形成された社会とみることができる。しかも彼らが精神的に満足を得ていたという事実は、人間関係の成功が、表面的でなく内面迄に及んでいることを示す。としたら、日本の様々な社会、コミュニティの中で、炭住社会は最も成功した例とすらいえるのではないか。

〔注〕

- 1) 宮本常一(1978)『民俗学の旅』文芸春秋
- 2) 谷 泰(1976)『牧夫フランチェスコの一日』日本放送出版協会
- 3) Lewis, O. (1965-6) 『ラ・ピーダ』(1970-1) みすず書房
- 4) Plath, D. W. (1980) 『日本人の生き方』(1985) 岩波書店